

豊かなスポーツライフの基礎を培う授業の在り方
—「主体的・対話的で、深い学び」を実現する授業改善の視点から—

木谷晋平

【要約】

保健体育科において「主体的・対話的で、深い学び」を実現する授業改善の在り方を模索していく中で、平成26年度から取り組んできた「クラスワーク」型の授業に着目した。第2学年「球技（ベースボール型）」において、「昔遊びである『ろくむし』をスポーツ化する」単元を構成し、「する」「みる」「支える」「知る」関わりに焦点を当てた「クラスワーク」型の授業を展開した。「技能」の定着等を学習の中心課題として捉えていた従来型の授業にはない、「クラスワーク」型の授業の特長が明らかになった。

【キーワード】 クラスワーク 主体的・対話的で、深い学び 見方・考え方

1 主題設定の理由

平成29年7月に新学習指導要領が公示され、その内容を適切に児童生徒へと学習させていくために、教育現場では様々な改善が始まっている。中央教育審議会答申によれば、学習指導要領改訂の方向性として「①何ができるようになるか②何を学ぶか③どのように学ぶか」¹の三点を明確に示した。特に、「③どのように学ぶか」については、「主体的・対話的で、深い学び」を実現する視点から学習過程の改善が示された。しかし、学校現場に目を向けると、「保健体育科では昔からアクティブラーニングを行っている」や「準備運動は全員が大きな声を出して同じ動がよい」という、従来のスタイル（以下、本研究では「20世紀型の授業」と表記する）を肯定する考えも少なくない。また、単に技能向上のための反復練習が行われていたり、優劣が明確な技能を形式的に評価したりするなど、「20世紀型の授業」は、今でも根強く残っているといっても過言ではない。こうした今日的な保健体育科の課題について、梅澤は「個々人の身体能力を向上させることや効率的に技をできるようにさせることを教育方法の中心に捉えれば捉えるほど、体育という教科だけが21世紀型の教育方法からかけ離れていく」²と言及している。

本校保健体育科では、一人が豊かなスポーツライフの基礎を培うための授業モデル、つまり「21世紀型の授業」を研究し、5年目になる。その成果の一つである「クラスワーク」型の授業は、「技能」を学習の中心課題として捉える授業を見直し、運動やスポーツに対する「見方・考え方」を働かせ、運動やスポーツを取り巻く環境に多様に関わっていく授業である。新学習指導要領の方向に照らし合わせると、「主体的・対話的で、深い学び」を実現する授業改善が求めている学び方に合致していると言える。

以上のことから、本研究では豊かなスポーツライフの基礎を培うために、「クラスワーク」の概念をふまえた上で「主体的・対話的で、深い学び」を実現する授業改善の一例を示すことを目的とした。

2 研究のねらい

豊かなスポーツライフの基礎を培うために「主体的・対話的で、深い学び」を実現する「クラスワーク」型の授業改善に取り組み、その特長を明らかにする。

3 研究の仮説

「する」「みる」「支える」「知る」関わりに焦点を当てた「クラスワーク」型の授業を行えば、「主体的・対話的で、深い学び」を実現することができ、「豊かなスポーツライフ」の基礎を培う学びを実現することができるであろう。

4 検証方法

- (1) 「昔遊び『ろくむし』*をスポーツ化する」単元において、診断的・総括的評価を行い、「クラスワーク」型授業の特長を分析する。
- (2) 学習カードから「する」「みる」「支える」「知る」関わりの記述を抽出し、「見方・考え方」を働かせている内容、記述量等を明らかにする。
- (3) 生活の記録や授業の感想から、保健体育科の授業が実生活（豊かなスポーツライフの基礎）にどのような影響を与えているか調査する。

5 研究の基本的な考えー「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業改善の視点からー

平成 29 年 7 月に公示された学習指導要領解説保健体育編によれば、次の 6 点に留意して「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を進めることとしている。³

- ア. 全く異なる指導方法を導入しなければならないと捉える必要はない
- イ. 児童生徒の目指す資質・能力を育むために授業改善を進める視点である
- ウ. 通常行われている学習活動の質を向上させることを主眼とするものである
- エ. 単元や題材など内容や時間のまとまりのなかで実現を図っていくものである
- オ. 深い学びの鍵として「見方・考え方」を働かせることが重要になる
- カ. 基礎的・基本的な知識及び技能の確実な習得を図ることを重視する

これまでと大きく異なる点は、「エ」「オ」である。「エ」に関して、田中は、「主体的・対話的で深い学び」を実現するには、「カリキュラムデザインの側面の充実を図る必要がある」と言及している⁴。また、「オ」に関して、澤井は深い学びの鍵となる『「見方・考え方」は三つの資質・能力を結びつける歯車のイメージ』⁵と表現しており、各教科の授業において「見方・考え方」の視点を与えることにより、単元全体が活性化していくものと捉えた。また、「主体的・対話的で、深い学び」に関して、田中は「授業づくりの 10 の要素」から「深い学び」と「浅い学び」を比較している⁶。「浅い学び」の例に目を向けると、例えば「学習目標」では「課題解決的な資質・能力の育成が含まれていない」ことなど、それぞれが例示されている。これは、いわゆる「20 世紀型授業」そのものであり、教師が授業を構築する段階で考えなければならないものである。

こうしたことから、「単元や題材など内容や時間のまとまりのなかで実現を図っていくもの」「深い学びの鍵として『見方・考え方』を働かせること」ができる授業の在り方を究明すべく、本校では平成 26 年度から「クラスワーク型」授業の進め方を実践してきた。そして、日々の授業が「主体的・対話的で深い学び」を実現するものになれば、保健体育科の目標である「豊かなスポーツライフの基礎を培うこと」ができるのではないかと考えた。

6 本校保健体育科における「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業改善の手立て

茨城大学教育学部附属中学校保健体育部では、平成 26 年度から「21 世紀型授業の在り方」に関する研究を重ね、現在一般的に行われている「ドリルゲーム・タスクゲーム・メインゲーム」の流れによる授業の限界を危惧してきている。端的に言えば、一般的に行われている授業は、「効率よく技能を身に付ける、高める」「相手チームに勝つ」こと等、「技能」を中心課題とすることが多いためである。梅沢も言及しているように、今のままでは体育・保健体育だけが従来型の授業の流れを進めるように

* 「ろくむし」とは、円と円を往復する攻撃側と、それを阻止する守備側に分かれて点を取り合う攻守交替型の昔遊びである。用具は、ゴムボール等を使用する。

なり、取り残されてしまう恐れがある。

そこで、「豊かなスポーツライフの基礎を培う」ことができる授業の一例として、「クラスワーク型」の授業を創造した。従来と大きく異なるのは、「運動やスポーツとの多様な関わり」に重点を置いていることであり、『する』『みる』『支える』『知る』といった多様な関わりこそが、保健体育科における「見方・考え方」を働かせていることに他ならない。

(1) 「クラスワーク」型の授業における多様な関わりについて

① 運動やスポーツとの「セルフワーク」

「セルフワーク」とは、運動やスポーツと自分自身との関わりを大切にしていける時間である。個人の活動を通して、純粋にボールを扱う楽しさや難しさ、記録向上や課題達成の喜びを通して、運動やスポーツの特性に触れていくことをメインとしている時間である。

② 運動やスポーツとの「チームワーク」

「チームワーク」とは、主に仲間との関わりにより課題を追究していく時間である。チームの課題達成に向けた戦術学習や小集団の関わりを大切にしている。また、「クラスワーク」型の授業では、コミュニケーションの進め方にも特長がある。ここでは、グループの作戦を立てたり、技能を高めるためのアドバイスをしたりする等、一般的な話し合い活動が全てではない。自分の考えたこと、覚えたこと等を豊かなスポーツライフの実現に向けた活動にするために、深い学びの鍵となる「見方・考え方」を働かせ、別のチームの仲間とルール変更の議論をしたり、技能を高めるための準備運動や練習の仕方を学級に広げたりするなど、学級や学年で新たな価値ある考えを生み出すための深い関わりを期待している。

③ 運動やスポーツとの「クラスワーク」

「クラスワーク」は、「チームワーク」の活動をさらに学級や学年に広げていく時間である。それぞれのグループの良さを共有したり、他クラスの活動を参考にしたりする時間である。また、自分たちの学びを創造していくために「する」「みる」だけでなく、「支える」「知る」活動を提案していく時間でもある。主にシェアリングの中で次の活動や目標を決めていき、学級、学年、学校へと広げていくという概念がある。平成 26 年から行っている本校独自の体育的学校行事「附中スポーツフェスティバル」は、教室での学びを超えて運動やスポーツの文化を創造し、社会に働きかけていこうとするものである。つまり、「クラスワーク」型の授業を進めることは、カリキュラムデザインの側面を充実させることにつながると思う。

(2) 「見方・考え方」を働かせる手立てについて

学習指導要領解説によれば、保健体育科における「見方・考え方」とは、「運動やスポーツを、その価値や特性に着目して、楽しさや喜びとともに体力の向上に果たす役割の視点から捉え、自己の適性等に応じた『する・みる・支える・知る』の多様な関わり方と関連付けること」⁷と明記されている。本校では、「見方・考え方」を働かせる手立てについて、次のように設定した。

① 一人一人の思いを表現する学習カードの工夫

「見方・考え方」を働かせ、社会とのつながりを意識し、一人一人の思いや考えを表現できるように、学習カードの記述の仕方を工夫している。「する、みる、支える、知る」視点から記述することにより、「ルールや競技の進め方を理解したことをどのように生かすのか」、「より良い運動やスポーツにしていくために自分の役割ではどのように関わるとよいか」等、自己をしっかりと見つめることができるのではないかと考えた。本校で使用している学習カードの特長として、単元を見通すことができること、授業のねらいが明記されていること、「する、みる、支える、知る」関わり（役

割)を明確にしていること、自由な記述ができる空間があることなどが挙げられる。(参考資料1「学習カード」)

② 運動やスポーツ文化を創造する「附中スポーツフェスティバル」

これまで、保健体育科では田村が著書「カリキュラムマネジメントの基本」の中で提唱しているカリキュラムデザインにおける三つの階層⁸に照らし合わせ、全体計画の作成、単元配列表の作成を試みた。そして、それらを豊かなスポーツライフの実現に向けた深い学びへと導くために、体育的学校行事「附中スポーツフェスティバル」とのつながりを大切にしている。本校で行っている附中スポーツフェスティバルの目標の一つは『『する、みる、支える、知る』視点で運動やスポーツに関わること』であり、附中スポーツフェスティバルを単元後半に位置づけるなど、自分たちで運動やスポーツの文化(社会)を創るデザインを心がけている。

7 授業の実践 第2学年球技「ベースボール型」

(1) 単元名 球技(昔遊び「ろくむし」をスポーツに！)

(2) 単元のねらい

本単元の主となるねらいは「する、みる、支える、知る」関わり活動を通して、「誰もが楽しめるスポーツをみんなで創り上げていくこと」である。個人やチームの枠を超えて、昔遊びを「いつでも、どこでも、誰とでも楽しむことができるスポーツ」に創り上げる活動を通して、「ルール」と「マナー」やスポーツ文化への考えを深めるようする。

①「何ができるようになるか」

○ 学びを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力・人間性

単に運動やスポーツを学ぶのではなく、昔遊び「ろくむし」をスポーツへと創り上げる単元を通して、ルールや審判の動き方などを学ぶ。その際、一人一役に責任をもち、学年全員で附中スポーツフェスティバル「ろくむし」を開催することを目標にしていく。

○ 生きて働く知識・技能

運動やスポーツを行う上で、ルールやゲームの進め方はとても重要である。しかし、昔遊びはそれらが曖昧であり、勝敗をつけることが難しい場面もある。遊びをスポーツ化することは、自分たちがより楽しく、エキサイティングになるルールやゲームの進め方を真剣に考え、知識として共有しなければならない。

また、より楽しく活動していくためには技能を高めていかなければならない。また、技能に関しては第2学年球技「ベースボール型」の単元であり、「投げる」「捕る」「中継する」「進塁する」ことを学ぶようにしたい。第1学年「ソフトボール」の単元において「打つ」活動を中心として学習してきており、「投げる」「中継する」技能に関しては、習得が不十分と判断した。

○ 未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力

既成の運動やスポーツのルールやゲームの進め方を簡易化するものではなく、遊びをスポーツにしていく学習の方向性により、一人一人がゴールの姿を見据えつつ、その全貌が見えていない単元となる。したがって、より思考力を働かせ、それぞれの役割で判断しなければならない。また、枠組みのない学習カードを使って絵や図、言葉で表現するとともに、周囲に様々なことを伝えなければならない状況も自然発生的に生まれてくる単元である。

②「何を学ぶか」

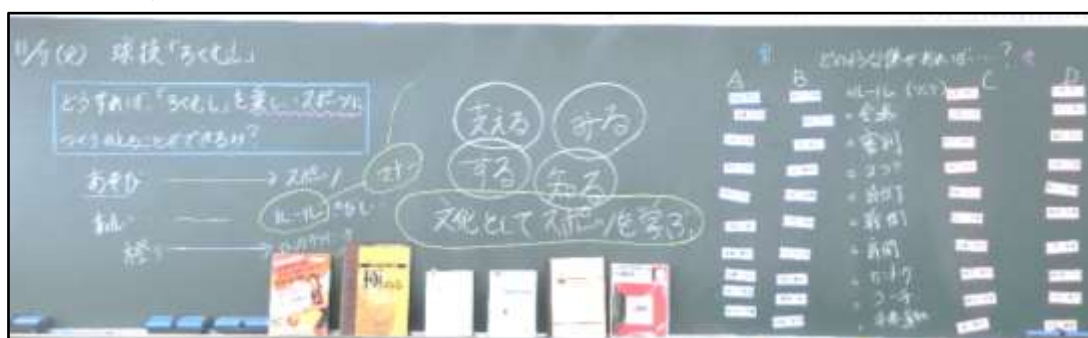
主に、豊かなスポーツライフを実現するための基礎となる「スポーツの成り立ち」を実際に学ん

でいくようにする。特に、スポーツの特性は長い年月を経て現在の姿があることを学習し、それぞれの運動やスポーツにはルールやゲームの進め方があり、生涯スポーツに向けてそれらを簡易化したり変更したりしなければならないことを学ぶ。このことは、現代社会においても、運動やスポーツに関連する施設や道具等の変更に伴い、より良い形で変化してきていることと関連付ける。

③「どのように学ぶか」

ア 主体的な学びについて

単元のオリエンテーションにおいて一人一役関わりの視点をもたせ、「どうすれば『ろくむし』をスポーツに創り上げることができるか」という学年全員の共通課題を設定した(資料1)。また、学級毎に係活動の内容に違いはあるものの、審判係や会場係、スコアシート係(参考資料2「スコアシート」)、ルール係(参考資料3「競技規則」)、など、スポーツ化に必要である10グループによる係活動を設定した(資料2)。また、スポーツ化には、単に「する」関わりだけでなく、「みる」「支える」「知る」関わりを充実させることが大切であることを確認した。



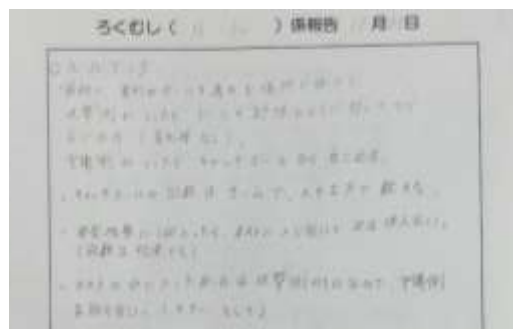
【資料1 オリエンテーション板書】

係名	内容
ルール	誰もが楽しめるルールを決める。競技規則を作る。
会場	適切なコートの大きさを決める。コートを作る。
審判	審判の分担をする。審判の動き、笛の鳴らし方を決める。
スコア	スコアシートを作成する。新聞係に結果を報告する。
技術	必要な技術を考える。技術向上のための練習を考える。
戦術	必要な戦術を考える。一般的な戦術をまとめる。
新聞	スポーツ化の流れを新聞にまとめ、広報する。
監督	誰もが楽しむことができるように、チームをまとめる。
コーチ	技術練習、戦術練習等の時間を設定し、指揮する。
準備運動	発生しやすい怪我を見極め、適切な準備運動を考える。

【資料2 係活動と内容(上記は2年1組の場合)】



【資料3 会場係】



【資料4 ルール係】

イ 対話的な学びについて

これまでの保健体育科の授業に目を向けると、「相手チームに勝つために話し合いをする」「技能を習得するためにアドバイスをする」といった活動が思い浮かぶのではないだろうか。さらには、「ICT 機器を活用するとよい」という雰囲気があり、タブレット端末やデジタルカメラ等を介した話し合いも増えてきている。しかし、保健体育科の時間に必要なのは、有益性のある対話である。「なぜそうなるのか」「何か変えることはできないのか」「もっと楽しく学ぶにはどうすれば良いか」など、本音で語り合うことができる教科である。クラスワークを充実させ、スポーツへと創り上げる活動を意図的に設定することで直接的な対話が増える。また、他のクラス仲間とルールや進め方を吟味する時間を設け、学年共通の課題「どうすれば『ろくむし』をスポーツに創り上げることができるか」に向けて、学級の枠を超えた活動を計画した(資料5)。



【資料5 スポーツ化に向けた係（関わり）活動のクラスワーク】

ウ 深い学びについて

単に運動やスポーツを学ぶのではなく、「豊かなスポーツライフを実現する」ための基礎を培うことを考えることにより、より深い学びを実現することを試みる。また、課題を「どうすれば…」と分かりやすく提示することにより、単に「今できる能力で活動する」という「する」ことだけに重点を置くのではなく、単元を通して「考えながら動く」、「もっと楽しく活動できるように運動やスポーツを変える」ことが実現できるように構成する。そのことが附中スポーツフェスティバル「ろくむし」開催に向けて、各学級で学んできたことを共有する必要性に気づき、スポーツ文化の発展につなげる深い学びになるのではないかと考えた。そのため、各学級の学びをつなげるために「交流掲示板」を活用した(資料6)。



【資料6 各クラスの交流掲示板（写真は2年2組）】

(3) 指導と評価計画（7時間扱い）

	時	○学習課題	関意態	思判	技能	知識
はじめ	1	セルフワーク（準備運動、キャッチボールアップ） ○ どうすれば、ろくむしを楽しいスポーツにすることができるか？	① ↓		① ↓	
なか	2	チームワーク…基本的な技能を身に付けよう。	↓	①	② ↓	
	3	クラスワーク…誰もが楽しめるスポーツを考えよう。	① ② ↓		③ ↓	①
	④本時	○ どうすれば、相手の進塁を阻止することができるか？		②		
	5	○ どうすれば、より楽しいスポーツを創り出すことができるか？			① ② ↓	
おわり	6 7	クラスワーク…昔遊びをスポーツに発展させよう！ ○ どうすれば、誰もが楽しいスポーツ大会を実現できるか？	② ↓	①	③ ↓	②

運動への関心・意欲・態度	運動についての思考・判断	運動の技能	運動についての知識・理解
① 話合いに積極的に参加しようとする。	① 球技を楽しむための自己の関わり方を見つける。	① 状況をみて進塁できる。	① 審判の行い方や運営の仕方について理解している。
② マナーを守ったり相手の健闘を認めたりして、フェアなプレイを守ろうとする。	② 体力や技能の程度等をふまえ、仲間とともに楽しむための運動の仕方を考えることができる。	② ねらった方向にボールを投げることができる。 ③ タイミングよく送球を受けたり中継したりする。	② 今日、主要な競技として行われている球技には、様々な成り立ちがあることを理解できる。

8 考察

(1) 「昔遊び『ろくむし』をスポーツ化する」単元において、診断的・総括的評価を行い、「クラスワーク」型授業の特長を分析する。

本単元における診断的・総括的評価（高田・岡沢ほか，2000）は，情意目標，運動目標，認識目標，社会的行動目標の四つに一致する授業評価尺度を用いたものである。それぞれの項目を3点（そう思う）から1点（思わない）で評価するものである。今回は第2学年1・2組の生徒80名を対象とした。また，本分析は，本授業を追った熊谷による茨城大学教育学部卒業論文「学校体育における生成の論理－『ろくむし』の研究授業を事例に－」⁹を参考とした。

「情意目標」の項目では，全ての項目において単元後の値が増加している。

	項目名	単元前	単元後	比較
情意目標	3 楽しく勉強	2.35	2.40	+0.05
	5 丈夫な体	2.38	2.56	+0.18
	12 精一杯運動	2.45	2.65	+0.20
	8 明るい雰囲気	2.35	2.53	+0.18
	16 練習時間	2.30	2.63	+0.33
	たのしむ	11.83	12.77	+0.94

【資料7 診断的・総括的評価「情意目標」】

さらに、総合的にみると、「中学校段階の各因子（目標）に関する診断基準」においても「+」となり、学習成果が高まったことが分かる。特に「練習時間」が高まったことは、監督係、コーチ係、準備運動係等が大いに機能していたからではないかと推察できる（資料7，11）。

「運動目標」の項目においても、全ての項目において単元後の値が増加した。

「情意目標」と同様に、単元前は「0」であった値が「+」を示した。特に「授業前の気持ち」では、既成のスポーツに見られる「〇〇くんがいるチームが強い」「自分は苦手だ」といった気持ちがなく、自分たちで遊びをスポーツにしていることが有益に働いたことが推察される（資料8）。【資料8 診断的・総括的評価「運動目標」】

「認識目標」の項目については、単元前から「+」評価であったが、単元後は四つの大項目の中で一番の高まりを見せた。「認識目標」は、クラスワークで考えられる「みる」「支える」関わりにつながる項目で構成されている。この項目の著しい高まりが、クラスワーク型授業の特長と言及することができる（資料9）。

「社会的行動目標」の項目では、単元前後ともに高い評価を示した。今回の単元において、遊びとスポーツとの違いで生徒が苦しんだ点は、「ルール」に関することである。「ルール」は、運動やスポーツの勝敗に直結しているため、何度も話し合いをしている様子を見かけた。それは、サッカーやバスケットボール等、ルールが確立されているスポーツの単元では見ることができない姿であり、「ルールを守る」「勝敗を認める」等の項目が高いことにつながったと推察される（資料10）。

		項目名	単元前	単元後	比較
認識目標	9	応援	2.65	2.93	+0.28
	6	作戦を立てる	2.53	2.78	+0.25
	10	他人を参考	2.65	2.85	+0.20
	15	友人・先生の励まし	2.33	2.70	+0.37
	20	積極的発言	2.15	2.60	+0.45
	まなぶ		12.31	13.86	+1.55
		項目名	単元前	単元後	比較
社会的行動目標	4	ルールを守る	2.73	2.93	+0.20
	18	自分勝手	2.80	3.13	+0.33
	1	勝つための手段	2.63	2.88	+0.25
	14	勝負を認める	2.68	3.00	+0.32
	19	約束ごとを守る	2.78	2.85	+0.07
	まもる		13.62	14.79	+1.17

【資料9，10 診断的・総括的評価「認識目標」「社会的行動目標」】

項目名	+	0	-
たのしむ（情意行動）	15.00 ～ 12.11	12.11 ～ 9.86	9.86 ～ 5.00
できる（運動目標）	15.00 ～ 11.28	11.28 ～ 8.80	8.80 ～ 5.00
まなぶ（認識目標）	15.00 ～ 11.95	11.95 ～ 9.72	9.72 ～ 5.00
まもる（社会的行動目標）	15.00 ～ 13.48	13.48 ～ 11.38	11.48 ～ 5.00
総合評価	15.00 ～ 47.45	47.45 ～ 41.22	41.22 ～ 20.00

【資料11 中学校段階の各因子（目標）に関する診断基準】

(2) 学習カードから「する」「みる」「支える」「知る」関わりの記述を抽出し、「見方・考え方」を働かせている内容、記述量等を明らかにする。

主体的な活動になるように、一人一人係に所属したことにより、学習カードには関わりの記述が大変多くなった。特に、自分の係活動の記述はもちろん、ほかの係が決めた内容が学習カードに記述されることで、スポーツ化を意識した深い学びを実現できたと考える。

右の学習カードでは、会場係が設定した「安全地帯」「サークル

の呼び方 (NEST)」、ルール係が設定した「安全地帯の使い方」と男子のルールを参考にした「ゲームの始め方」等が記述されており、様々な係の情報が共有されていることが分かる (資料 12)。

【資料 12 学習カード】

単元終了後の「授業を終えて (考えたこと)」の記述を見ると、単に、「技術の向上」や「ゲームの勝敗」について記載していないことが分かる。「記録係として考えたこと」や「ルールの意味や大切さ」、そして「どのようにしてスポーツが作られて来たか」等、深い学びにつながる記述が見られた。このような記述は、「豊かなスポーツライフの基礎」につながるものであると判断できる (資料 13)。

11/22 (水) ☆ろくむしを全力でプレーする。 ☆ろくむしについてまとめる。
☆新ルールについて

①安全地帯の使い方
安全地帯に2人ストムになったら 入らなリ、5回以上使用しないというルールができたので試合が円滑に進むようになった。

②スタート方法について
ろくむしのスタート方法で男子がやっているみたいにボールをバウンディングするのはいい方法だった。ただ1試合目の初めみたいに各チームの代表者1人がボールをとりに行くのは、走力の差がものをいうので、初めから結果が見えてしまうところがあるので、つまりなくなるかな?とも思った。(図2)

(図1) 守備の人がNEST内にいる人にボールを上げて、そのボールを攻撃側が野球みたいに腕でバウンディングしてとります。

(図2) 審判がボールを上げて、守備・攻撃の代表者が走ってとりにいく。ボールは1人ずつ

授業を終えて (考えたこと)

ろくむしを「する」場面では、チーム内で作戦を考えて行うことができた。守備はまた穴があったので、今後やる機会があれば守備のほうも頑張りたい。
「支える」「知る」では係としてどう記録したらいいか考えたり、より公平になるルールを理解しながら進めたりできた。
スポーツを作るのは大変なことがわかった。あいまいな部分があってもいけないけれど、細かすぎても難しくて手が届きにくくなってしまうから。今あるスポーツはそういう課題をクリアしているからおもしろくていろいろな人ができているのかと思った。

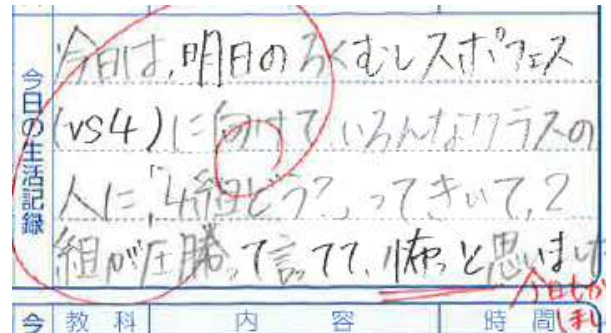
授業を終えて (考えたこと)

今回のろくむしは1年生のころよりもとても本格的なルールができて、1つのスポーツがつくられるのが大変なことができた。自分達で考えることができてどんなルールが必要なのか、何を禁じられたらつまらないのか、が決めかわり、ルールの大枠で、チームプレーの仕方やなど今までとは全然違う学びもすることができたのでとても良かったと思う。また、どんなふうにうまくなれば勝てるのかを考えたうえでどう活動するかを考えるチームはとても難しいと感じることもあったけれどみんなが楽しくできるようにということを一番に考えて活動できたので良い活動にできたのではないかなと思った。

【資料 13 学習カード「授業を終えて（考えたこと）」】

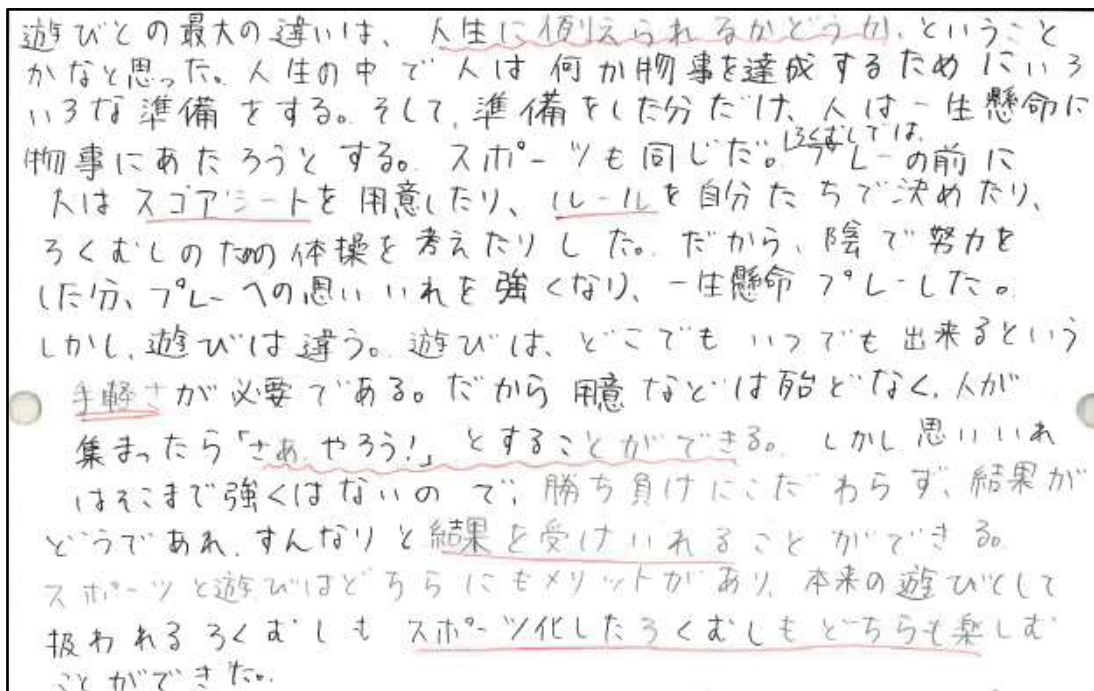
- (3) 生活の記録(日記)や授業の感想から、保健体育科の授業が実生活(豊かなスポーツライフの基礎)にどのような影響を与えているか調査する。

本校で取り組んでいる生活の記録は日々の出来事を綴る日記のようなものである。「ろくむし」の単元中は、生活の記録に「ろくむし」に関する記述がとても多い。これらは、保健体育科の授業が生活の一部であることを証明しており、このような経験が豊かなスポーツライフにつながるものであると考える。また、「クラスワーク」型で授業を行っていない「ろくむし」単元の場合、生活の記録には勝敗に関する記述が多くなる。「クラスワーク」型の授業単元の方が、ルールや運営に関する記述が多くなるなど、明らかに深い学びをしている様子が分かる。(資料 14)



【資料 14 生活の記録】

また、授業後に聞いた単元「ろくむし」の感想には、遊びとスポーツについて深く考えている記載が多く見られた。これは、「ろくむし」の単元を「クラスワーク」型の授業展開にしたことにより生まれたことではないかと考える。資料 15 では、「遊びの良さ」と「スポーツの良さ」を比較して、人生と結びつけた内容である。「豊かなスポーツライフの基礎を培う授業」とは、運動やスポーツが自分の生活や人生にどのように関わっていくのかイメージすることができる授業である。そのヒントを資料の記述から得た気がする。(資料 15)



【資料 15 単元後の「ろくむし」の授業に関する感想】

9 成果と課題

(1) 成果

- ・「クラスワーク」型の授業を行うことは、「主体的対話的で、深い学び」を実現する授業改善につながる事が分かった。
- ・単元のねらいを明確にすることにより、生徒の主体性を促すことができる。

(2) 課題

- ・誰もが「クラスワーク」型の授業の進め方を理解できるように、マニュアル的なものが必要である。
- ・係活動の話合いと、チームでの話合いとのバランスが必要である。
- ・「クラスワーク」型の授業に合う単元と、そうでない単元があり、中学校保健体育のカリキュラムをより深く吟味する必要がある。

10 引用・参考文献

- ¹ 「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」文部科学省 2016
- ² 「体育における『学び合い』の理論と実践」梅沢秋久 大修館書店 2016 p8
- ³ 「中学校学習指導要領保健体育編解説」文部科学省 2017
- ⁴ 「アクティブラーニング『深い学び』実践の手引き」田中博之 教育開発研究所 2017
- ⁵ 「授業の見方『主体的・対話的で深い学び』の授業改善」澤井陽介 東洋館出版社 2017
- ⁶ 「前掲書」田中博之
- ⁷ 「中学校学習指導要領保健体育編解説」文部科学省 2017
- ⁸ 「カリキュラムマネジメント入門」田村 学 東洋館出版社 2017
- ⁹ 「学校体育における生成の論理ー『ろくむし』の研究授業を事例にー」熊谷 萌 茨城大学卒業論文 2018